

国際統計協会第56回大会（ポルトガル，リスボン）

水野谷武志*

1. 大会全体の概要

標記の大会が2007年8月22～29日にポルトガルの首都リスボンで開催された。国際統計協会（International Statistical Institute：以下ISI）による大会の長い歴史の中でポルトガルが開催地となるのは初めてであった。大会組織委員長の歓迎挨拶によれば、今大会には120カ国から約3千人の参加者があり、発表数は1,700以上であった。会場はリスボン市街中心からテージョ川に沿って河口に向かい、1974年の革命の日付にちなんで名付けられた4月25日橋を少し過ぎた位置にあるリスボン会議センター（Centro de Congressos de Lisboa）であった。22日の18：00から第1講堂にて大会開会式が、続けて第1ホールにて歓迎式が行われた。開会式では、大会組織委員長Paulo Gomes氏、ISI会長Niels Keiding氏をはじめ、ポルトガル大統領Anibal António Cavaco Silva氏等から挨拶が述べられ同時通訳もされた。これらの挨拶に続いて、若手注目歌手のMarizaさんによるFado（ポルトガルの代表的な民族歌謡）、リスボン工科大学の学生によるTuna（学生によるポルトガルの伝統的なミュージカル）が参加者を大いにもてなしてくれた。大会組織委員会が大会期間中に発行したISIニュースによれば開会式には約2千人が出席した。23～29日に各種分科会が開かれた（ただし25日午後と26日は休み）。23日夜の歓迎夕食会と28日夜のお別れパーティーがテージョ川に面した国際公園

（Parque das Nações）内にある施設で盛大に行われた。経済統計学会からの参加者は筆者が把握した限りでは、発表参加が泉弘志・李潔（共同報告）、張南、杉橋やよい、筆者、非発表参加者が藤井輝明の各会員であった。

2. 分科会の概要

分科会の種類には招待形式（Invited Paper Meeting: IPM）と自由参加形式（Contributed Paper Meeting: CPM）があり、IPMは主にISIの下部組織である6つの部会や各種委員会によって企画・準備され、CPMは大会組織委員会によって予め用意されたテーマ（計157テーマ）に参加者の誰もがエントリー（最大1人1発表）して発表できる機会を与えている。なお、CPMの形式には口頭発表とポスター発表があり、また口頭発表では任意のテーマで5人以上の発表者を組織すれば特別分科会（Special Topic Contributed Paper Meeting: STCPM）を設置する道が大会参加者に開かれている。分科会の数は、大会受付の際に配布された最新のプログラム（Information Bulletin No. 3）によれば、IPMが94、STCPMが40、CPMが95であった。各分科会に提出された発表論文（各分科会で提出が求められる論文の最大分量はA4サイズでIPMが8枚、STCPMとCPMが4枚）の数は、2007年発行の*ISI Newsletter*（Vol. 31, No. 2, p.5）によると、IPMが214、STCPMが163、CPMの口頭発表が715、CPMのポスター発表が185で、合計で1,300近くにもものぼる。1日の時間割は、平日には3つの時間帯（9：30～11：45、13：15～15：30、15：45～18：30）、25日に

* 北海学園大学経済学部

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4-1-40（大学）

は2つの時間帯（8：00～10：15，10：30～12：45）が設定され，それぞれの時間帯に大小16の発表会場が設けられ，各種分科会が並行して開催された。1人当たりの発表時間は，IPMが20～25分，CPMが15分（質疑応答の時間をふくむ）である。IPMには討論者による発表とフロアーとの質疑応答が設定されており，前者には1人約20分，後者には20分から分科会によっては1時間近くをとっている場合もある。以上の通常開催される分科会のほかに，今大会の開催地と開催年に関連して開かれた分科会（IPM91：地震・津波の統計的モデル分析－1755年リスボン大地震との関わりで，STCPM10：ポルトガルの合計特殊出生率－政府統計を使った新しい方法論，IPM78：カール・ピアソン生誕150周年，等）や，2つの特別公開分科会（ISIの専門家における倫理規定，グローバルな統計的インフラストラクチャー）が開催された。

3. いくつかの分科会の紹介と感想

IPMとCPMともに取り上げている分科会のテーマは様々である。すべての分科会のテーマ一覧および各分科会に提出された発表の論文はISIリスボン大会の公式ウェブサイト（<http://www.isi2007.com.pt/isi2007/index.php>）に公開されている。筆者は主に政府および国際統計にかかわるIPMとSTCPMに参加したので，その中で特に印象に残ったものについてだけ簡単に紹介する。

「国際統計基準を更新する：それはうまく機能するか？」（24日IPM18）は，3人の報告者と2名の討論者から構成された。第1報告者のLandefeld氏（米国商務省経済分析局）からは経済統計，特に国民経済計算体系（SNA）の2008年公表予定の改訂内容およびその問題点について発表があった。第2報告者のLinacre氏（オーストラリア統計局）からは社会統計における国際基準の不足と政策立案者の要請に応えられる国際基準の必要性

が述べられた。第3報告者のBecker氏（国連統計部）からは国際標準産業分類の第4次改訂（ISIC Rev. 4）の内容と課題について説明があった。つづけて第1討論者のSchmelz氏（スイス統計局）からはLinacre報告に対してEU統計局（Eurostat）が作成している社会指標をどう評価しているのか，国際基準づくりの主体として国連統計部がありうるか等の質問が提出された。第2討論者のHabermann氏（現米国センサス局・元国連統計部長）からは国際基準の更新と普及において鍵となるのはその基準が諸政策と直結しているかどうかであり，その意味では経済・社会統計に関わる最新版の統計基準の普及は容易ではないこと等が指摘された。フロアーからはコメントが続出し規定の時間よりも30分延長するほどであった。その中で印象に残ったのは，国際基準の作成と普及について比較的悲観的な見解が報告者や討論者から出されたことに対して，国際機関による長い歴史の蓄積によって現在の国際基準が築き上げられてきたことがもっと重視されるべきではないかというCheung氏（現国連統計部長）の発言であった。

「統計，知識，政策：これらをどうつなげるのか？」（24日IPM94）は，1人の基調報告に対して4人の討論者を配し，さらにフロアーからの討論に1時間近くを充てた分科会であった。この分科会はOECDが2004年と2007年に開催してきた「統計，知識，政策についてのOECD世界フォーラム」に焦点をあてて企画されたことが座長のGiovannini氏（OECD主任統計官）から説明された。基調報告をしたCook氏（OECD）は，2007年フォーラムに参加した世界各国の政治・経済・NGO等の重要人物のインタビューを10分程度にまとめた動画を上映した上で，GDPに代る，社会の前進（progress of societies）を測る指標を開発し，社会の状態をより良く理解し，これに基づいて意思決定をすることがすべてのレベル（政策立案者や企業や市民）

にとって重要であると強調した。フロアーからはいくつか手厳しい指摘があった。例えば、このフォーラムが1960、70年代のいわゆる「社会指標運動」の失敗の教訓から何を学んでいるのか、「前進」を測る指標が総花化はしないか、等の疑義が提出された。最後に座長もさらなる議論の必要性を認め、次期フォーラムがソウルで2009年に開催予定であることが告知された。

「データの品質評価：道具と経験」（28日 STCPM13）では5人の報告者のうち4つの報告に興味をもった。第1報告者のElvers氏（スウェーデン統計局）は「データの品質を評価する方法および道具についてのハンドブック」の最終版について説明した。このハンドブックは、これまでEurostatが主導してきた、EUにおける統計の品質向上のための理念や方法が整理されている点で、今後、注目すべき文献になるであろうという印象を受けた。第3報告者のLohauss氏（ベルリン・ブルンデンブルク州統計局長）からは最新版のISO20252の紹介と、統計の品質評価へのその適用可能性について説明があった。これに対するフロアーからのコメントの1つとして、ISO20252の認証を受けることは組織改善のきっかけにはなるが、継続的な改善には別の手立てが必要ではないかという意見が出された。第4報告のLinden氏（Eurostat）からはEUにおける統計の品質改善の取り組みの1つである、個別統計調査の実施責任者による自己点検プログラム（DISAP）の実施状況が紹介された。DISAPによる点検が多くの国内機関で既に実施されてきたことは筆者も承知していたが、最近の動向として、国連統計部・統計活動調整委員会（CCSA）との協働で国際統計機関にも適用できる点検表が開発されようとしていることを新たに知った。第5報告のLorca氏（スペイン統計局）からは、上述のDISAPが開発した点検表に基づいて、スペイン統計局が実施する主要統計調査を評

価した経験が報告された。スペイン統計局では品質活動は始まったばかりであるとしながらも、今回の点検結果を統計利用者のための手引きにまとめて今年の10月に公表する予定であることがフロアーからの質疑応答の中で述べられた。

「生活時間の測定および研究」（29日 STCPM40）では5人の報告者のうち2つの報告が特に興味深かった。1つはFisher氏（オックスフォード大学）による英国における生活時間の地域比較である。都市と地方の定義を単純な人口密度だけによるのではなく、居住地域形態（settlement type）を加えた新しい定義（人口集中都市、都市周辺地域、村落、孤立した集落）に基づいて、行動時間にかなりの差が各地域によって見られることが示された。もう1つはWolfson氏（カナダ統計局）による「良い生活時間（Good Life Time: GLT）」指標の研究である。幸福（Well-being）あるいは社会の前進を測る概念が健康、収入、余暇時間の3つの分野から構成されると仮定し、各分野の指標を定義し、年齢階級別に3指標ともに基準値を上回る人の割合を算出している。この研究は、カナダ統計局による各分野のマイクロデータを統計的にマッチング（synthetic matching）させることで可能になっている。幸福の概念化、指標の選択、基準値の設定などに多くの議論の余地があることに報告者も言及していたが、非常に意欲的な研究であると筆者は感じた。

4. 次期ISI大会

第57回大会は2009年8月16～22日に南アフリカ共和国のダーバン市で開催される予定である。今回の大会期間中（27日夜）に、次期大会の組織委員長、ダーバン市長、在ポルトガル南アフリカ共和国大使を迎えて盛大なカクテル・パーティーが行われ、2年後の大会が大きくアピールされた。経済統計学会から多くの会員が参加されることを望みたい。